国立大学法人信州大学　令和２年度完了報告書

１．調査研究概要

新学習指導要領で重視されているカリキュラム・マネジメントに係わる教職員の資質・能力の育成をめざし、実践校３校で各テーマに基づいた実践的研究を行った。特に、本年度はコロナ禍の中、学習環境が著しく制約されたことから、各校必然的に教育課程を再編成しなければならなくなり、「学校での学び」「家庭での学び」、その２点を結ぶ「オンラインでの学び」の在り方を模索し、子供たち自らが「自学」を展開する学びのための教育課程の編成の在り方や指導法についての研究を行った。

また、教育センターの集合研修において、これまでに開発したカリキュラム・マネジメント研修の内容を見直し、「カリキュラム・マネジメントの手引き」を作成した。

コロナ禍の中、テーマbに係わる中学校で予定していた総合的な学習を核にしたカリキュラム・マネジメントの実証研究が本年度は実施できなかったので、今後継続的に研究を深めていきたい。

テーマcに係わる小・中・高を一貫する教育課程の在り方について、中学校と高校1年との接続の実質的な実践的研究が本年度からの開始となり、次年度以降学年を追って実践していくことになることから、来年度以降高校2年生以上の学びとの小中学校との系統性を明らかにし、市内の学校に成果を教育センターの研修講座等を通じて、フィードバックしていくことが重要となる。

（実践地域における年間実施スケジュール）

月	取組内容
６月	第６回カリキュラム・マネジメント検討会議（検証推進について）(6/9) 実践校への聞き取り調査
７月	第１２回研究推進会議（年間指導計画の確認等） 実践校への聞き取り調査
８月	第１３回研究推進会議（１学期の実践研究の検討等） 実践校への聞き取り調査 教育センターでの集合研修
９月	第７回カリキュラム・マネジメント検討会議（研修教材の検討等）(9/15) 実践校への聞き取り調査
10 月	第１４回研究推進会議（研修教材作成に向けて等） 実践校への聞き取り調査
11 月	第１５回研究推進会議（実践校の事例検討） 第８回カリキュラム・マネジメント検討会議(11/18) （ヒアリングに向けて教員の資質・能力の育成について成果の検討等）
12 月	第１６回研究推進会議（実践校の事例検討） 第９回カリキュラム・マネジメント検討会議(12/16) （ハンドブックの作成に向けて）

１月	第１７回研究推進会議(研究まとめに向けて)
２月	第１８研究推進会議(研究のまとめに向けて) 第１０回カリキュラム・マネジメント検討会議(2/26) (研修テキスト完成、カリキュラム・マネジメント能力の育成の成果検証)

２．調査研究の内容

実践校【長野市立加茂小学校】

（１）　研究テーマ

☑　a 学校の教育目標等（目指す児童生徒像や教育課程編成の重点など）の設定及び実現に向けた研究

☐　b 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究

☐　c 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究

（２）　調査研究の内容

研究初年度作成したグランドデザインに基づいた教育課程を編成し、具体的な教育実践で検証する中で、グランドデザイン等の再検討を行うことで、学校教育目標の設定のあり方を探り、地域の教育資源を活用した教育課程を教職員全体で編成し教育実践を試みる。

（３）　調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策

［成果］

①．学校教育目標の設定に関して

全教職員で、学校教育目標具現に向けて必要な人的・物的資源等について確認することを目的に、職員アンケートを実施し、願う子どもの姿を学校目標に照合させ具体の姿として洗い出す作業を行い、グランドデザインを教職員にとってわかりやすいように、「児童の様子」「学校長の願い」「教職員の目標」の３項目を分けた目標に変更した。研究テーマも、コロナ禍の緊急対応もあり、前年度末に編成したグランドデザインを年度初めに再度見直し、新学習指導要領の意図を反映させ再編した。さらに、夏休み明け、教育課程全体を見直す職員研修で再度見直す作業を行った。この作業を通して、グランドデザインの作成は、教職員全員で行うことであるという意識を啓発することができたと同時に、状況に応じて臨機応変に変更していくことも重要であることを再認識することができた。

②．学校教育目標の具現に向けての学年経営・学級経営・教科運営について

加茂小スタンダード(職員の目標)で掲げた「学び合い、学び続ける教職員」「多様性の創出」に係る取組として、以下の内容を実施した。

・学年担任制や教科担任制の導入
・同学年、他学年職員との系統性を意識した教材研究
・オンライン授業研修
・地域教材を活用した授業づくり
・子どもたちがテーマを決めて進める探求学習や自学ノートの導入　など

③全体としての成果

・グランドデザインを全教職員で見直す作業を随時取ることで、全教職員で学校を運営するという意識化ができた。

・**学年担任制や教科担任制を取り入れた**ことにより、教師の意識が**学年・学級を越えて子供たちを育てるという方向に変わった。**

・**グランドデザインに位置付けた自学ノートを３年生以上**で導入したことにより、子供たちは家庭学習として毎日学習内容を**自分で考えて取り組むことができるようになった。**

・地域の様々な人とのつながりを通して、教科の力や集団行動（社会のルール）の力の育成をめざし**地域教材を活用した授業づくりを試み**たことで、子供たちの**主体的で意欲的な学習の取り組みがみられた。**

・**ＩＣＴ活用**を含めた多様な教育方法の在り方を探るために、**職員会等を活用してオンラインの研修**を行ったことで、GIGAスクール構想への対応がスムーズに進んだ。

・人権教育を中心に、**学年を縦割りした学習**を試みたことで、**他学年との交流**がスムーズになった。

［課題と改善方策］

①自学ノートの活用は進んだが、**個々による取り組みの差も大きく、教室での学びとの連続性や各自の関心に合わせた課題設定の在り方など**さらに検討していく必要がある。

② **不登校傾向の児童の学習支援**、学校や学級とのつながりを保つために、オンラインを活用した家庭や校内別室をつなぐ授業の在り方の充実についての研究を深める必要がある。

③カリキュラムを教職員が自分たちで検討するという意識は出てきているが、**学習指導要領の内容をきちんと理解した上での展開までは達しておらず、これまでの経験知から配列の組み直し等を行っている段階**なので、カリキュラム・マネジメントに関わる基本的な内容の教職員の研修の充実が必要である。

（詳細は資料参照）

（４）　実践校における年間実施スケジュール

月	取組内容
６月	学習内容の見直し
７月	オンラインでの授業の研修
８月	カリキュラム・マネジメントに関わる校内研修
９月	修正した指導計画に沿った授業実践
10 月	教育センターの聞き取り調査による課題の明確化
11 月	修正した指導計画に沿った授業実践
12 月	↓
１月	↓
２月	授業実践の振り返り
３月	来年度に向けての計画立案

実践校【長野市立西部中学校】

（１）　研究テーマ

☐　a 学校の教育目標等（目指す児童生徒像や教育課程編成の重点など）の設定及び実現に向けた研究

☑　b 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究

☐　c 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究

（２）　調査研究の内容

学習の基盤となる資質・能力の育成につながる自主学習の在り方と、自主学習を有効に機能させるための教育課程の在り方について実践を通して検証する。

（３）　調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策

［成果］

①．学習の基盤となる資質・能力の育成につながる自主学習の在り方の取り組み

主体的な学びを展開する力を培うことを目標に、**授業スタイルの変革に向け職員の意識改革**を目指した。「修得」をキーワードに、**学校でしかできない対話的・協動的な学習場面を意図的に仕組み**、授業と自主学習・家庭学習との関係性を高める工夫に取り組んだ。結果として、わかる授業の構築に向けて、教師が教えるスタンスの授業から**生徒が活動する授業へ**と授業設計において教師の意識変革が出てきた。

また、**生徒自らが学ぼうとする環境作り**に焦点を当て、テストなど可視化される学力の向上を目指して、生徒の学習意欲の向上につなげる**テストの在り方**の検討、**学習相談タイム（質問対応）**の設営、**自学・個別学習の機会**の設営に取り組んだ。

結果として、教師の**同僚性を生かした授業研究が展開**されるようになり、他教科の研究にも先生方が積極的に関わるようになったと同時に、テストの在り方や個の学びと協働の学びの関係を意識した授業設計を先生方が行うようになった。

②．自主学習を有効に機能させるための教育課程の在り方について

教室での学びと教室外での学びの内容の連動性を、教師の意識改革・授業改善の視点として以下の内容に取り組んだ。

ア．教室の授業では

・教師が一律に進める授業展開から、**生徒が「できるようになった」を実感する授業**へ

・**授業と自主学習・家庭学習とが連携する学び**の展開へ

Step1　　家庭学習で	Step2　　学校の授業で	Step3　　家庭学習で
○知識/理解に関わる予習プリントを配布し、調べて記入するよう促す。	○予習を基に思考や判断が働く問題を提示し、生徒が考えを深める場を仕組む。	○Step1,2 の学習内容を、問題集のワーク等で確認するよう促す。

・　対話的・協動的で深い学びの学習展開に向けて（ジグソー学習・協働での学習等）

イ．家庭学習では

・**個人追究として予習**の位置づけ

・**知識・技能の定着をねらった家庭学習**

ウ．補習・学び直しについて
・学びを促し成果を自覚できる「**リベンジテスト**」の実施
・**朝学習**での**基礎・基本の定着**をめざす自主的な学習
・**理解不足を補う教科担任ともに学び直しを行う学習相談時間**での自ら学ぶことの習慣化
・異学年が集まる**学習サポートクラブ**（９教科14 講座）での自由な学び

（取り組みの詳細は別資料参照）

成果として、**自学自習で知識・理解**に関わる内容について**おおむね習得**できること、**思考・判断・表現、資料活用・技能に関わる能力**の育成は**教室での協働での学習が有効**であることが改めて示され、自学を中心とした家庭学習の内容と教室での協働での学習の内容の差別化に取り組むきっかけをつかむことができた。

また、学習サポートクラブでの学びでは、「テストで地理の問題が解けなかったから「地図マスター」の講座に参加したけど、地図の見方の面白さや「逆さにして観ると、違った発見がある」という驚きがあって、とても楽しかった。」「他の学年の人とグループになって、協力して問題を解いたけど、さすが２，３年生は見つけるのが早いなぁと思った。」「授業では観ることが無いかもしれない実験映像を観ることができて、とても楽しかった。」といった感想にもみられるように、学びの本質に触れ**自分にとっての課題が**明確になると、自分から学習に向かっていく姿が見られた。リベンジテストや学習相談の時間など、自主学習の時間を教育課程の中に設定したことで、生徒自らが求めて学ぶ習慣化が促されたといえる。

［課題と改善方策］

まだ、学習指導要領の趣旨、学びの個別化最適化と個別学習との違い、教科等横断的な学習指導の在り方等の共通認識が確立していないことから、カリキュラム・マネジメントの視点から、教師の意識改革ための校内研修の充実が必要である。

（４）　実践校における年間実施スケジュール

月	取組内容
６月	指導計画の見直し
７月	朝学習・学習相談・学習サポートクラブ
８月	↓
９月	↓
10 月	↓
11 月	公開研究会　カリキュラム・マネジメントの研修会
12 月	↓
１月	↓
２月	公開研究会　カリキュラム・マネジメントの研修会
３月	↓

実践校【長野市立長野中学校】

（１）　研究テーマ

☐　a 学校の教育目標等（目指す児童生徒像や教育課程編成の重点など）の設定及び実現に向けた研究

☐　b 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究

☑　c 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究

（２）　調査研究の内容

各教科学習との関連や高等学校の「産業社会と人間」や「探求」との系統性を意識した小・中・高を一貫するカリキュラムの開発を行う。

（３）　調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策

［成果］

①「産業社会と人間」や「探求」との系統性を意識した小・中・高を一貫するカリキュラムの開発について

自分と地域の事象・人々との関わりのなかで、自分の「問い」を設定し、調査や体験活動を通して「問い」の答えを追究し、他者との互恵的・協働的な学びの中で導かれた「問い」の答えを、自らの生活や生き方に生かして行動する能力の育成を目標として、総合的な学習を中心とした学年の発達段階に対応した系統的な探求学習のカリキュラムを開発した。小学校教育との接続では、「探究基礎」を設定し、読解力表現・数理演習・コミュニケーションの３視点での学習を、「探求学習」では、１学年では長野市の農業や観光業についての理解を深める「長野市で生きる私」の学習を、２学年では社会体験学習を中心に「１４歳の問いかけ」の学習を、３学年では自分が追究したい「問い」を設定し、体験的な活動を行う「地域に貢献する私」をテーマに学習を展開した。

結果として、生徒たちの自分たちが生活する地域社会の課題を真摯に見つめる機会となり、地位の人たちと協働で災害復興に取り組んだり、地域の伝統文化を継承する取り組みを行ったり、バス停の休憩場所を設置したりと、学校での学びと地域での活動とを連動させた学習を展開することができた。

中高接続については、高校１学年の「産業社会と人間」に、地域社会と人々の生活に関わる学習経験を生かした探求の学びや、高校２学年の「課題探究プログラム」における自己課題の設定や探求活動や情報発信等に結びつけることができた。

<table>
<tr><td colspan="3">市立長野高等学校の教育
【高校２年生】　課題探究プログラム
【高校１年生】　産業社会と人間</td></tr>
<tr><td rowspan="2">市立長野中学校の教育</td><td>探究学習</td><td>・地域に貢献する私（３学年）…自分が追究したい「問い」を設定し，体験的な活動を行い，まとめていくことで，地域の一員としての意識を高める。
・１４歳の問いかけ（２学年）…社会体験学習を通して，問いの答えを見いだし，自己の生き方を考えたり、人々と協調して生きていく態度を養う。
・長野市で生きる私（１学年）…長野市の農業や観光業についての理解を深め，自己の生き方について考える素地を培う。</td></tr>
<tr><td>探究基礎
・読解表現
・数理演習
・コミュニケーション</td><td>通常の学び
小→ 中 →高の系統を重視した体験重視の内容配列
教科と総合的な学習との関連を考慮した展開
自学…「自分で学べるプロジェクト」の展開</td></tr>
<tr><td colspan="3">長野市内の小学校教育</td></tr>
</table>

②Teamを活用して学校と家庭をつなぐ授業の推進について

GIGAスクール構想への対応として、高等学校の学習展開を参考にオンライン授業の試行を行うために、中学校の教育課程を見直し教科の学習内容の配列を組み替え、以下の内容に取り組んだ。

・英語…感想の書き込み・議論など
・社会…生徒による動画作成と共有など
・体育…表現・体つくり運動の動画など

成果として、生徒の家庭学習や自主学習が充実した。教職員にとっては、休校になった時期の学習内容を効果的に実施するための教育課程の見直しが必然となり、指導計画の組み替えを行ったことで、教職員のカリキュラム・マネジメントを意識するきっかけになった。

［課題と改善方策］

①総合的な学習を核とした中学と高校との連続性と系統性は、指導計画・生徒の活動等でおおむね達成されてきたが、教科学習における教科の目的に即した系統性については、曖昧な内容が残っており、カリキュラム・マネジメントの視点から学習指導要領の解釈等の研修が必要である。

②探求学習の成果が出るとともに、生徒の興味・関心が多様化することから、生徒の関心意欲を重視した多様な学びに対する対応をどのように考えていくかを探る研究が必要となっている。

③ICT活用に当たっては、実施することで精一杯の状況のため、各教科の目的と学習意図の整合性を今後研究する必要がある。

④カリキュラム・マネジメントとして、教科横断的な内容（SDGs）の扱いを検討する必要がある。

（４）　実践校における年間実施スケジュール

月	取組内容
６月	教育課程の見直しと教育内容の配列の組み直し
７月	ICT の活用による OnLine 授業の試行
８月	カリキュラム・マネジメントと ICT 活用に関わる研修
９月	ICT を活用した授業の公開研究
10 月	↓
11 月	探求学習の授業研究会
12 月	↓
１月	探求学習の学習発表
２月	授業実践の反省
３月	次年度に向けて教育課程の検討

３．実践地域全体としての調査研究の結果明らかとなった成果や課題と改善方策

（〇：成果，●：課題）

〇グランドデザインを全教職員で見直し活動を通して、学校教育目標の具現化に向けた教育課程の編成の在り方と授業改善の視点を教員が持てるようになった。

〇地域の教育資源の活用と教育課程の編成とが有機的につながっていることを教員が意識できるようになった。

〇教室での学びと教室外（家庭等）での学びの差別化を意識した指導計画の作成や学習展開を考え実践するようになった。

〇グランドデザインを全職員で作成したことで、指導の方向性が全職員で共有され、児童生徒が「何を」「どのように」学ぶかが校内で統一され、児童生徒が自ら課題を持ち、自主的に学習に向かう姿勢が見られるようになった。

〇総合的な学習の時間を核に、資質・能力を明示した指導計画を作成したことで、教科の目的や教科間の関係等を意識した教師のカリキュラム・マネジメントに関わる資質・能力の向上に役立った。

〇中学校を核にした教育課程の編成を考えたことにより、小中高を貫くカリキュラムの在り方を提案することができた。

●学習指導要領の改訂の趣旨を十分に理解されているとはいえず、これまでの教育経験から教育課程の編成に当たって指導計画を立案している場面も多く、教科等横断的な指導に関しても、教科の目的と課題との連動性が曖昧なまま教育実践が行われている場面もあり、カリキュラム・マネジメントに関わる研修の充実が求められる。

●自学の在り方について、道筋は見えてきているが、取り組みに対する個人差や興味関心の多様性に対して、どのように対応していったらよいかが、教師の悩みとなっていることから、個別指導の在り方や多様化する学びへの対応についての研究を深める必要がある。

●GIGAスクール構想に向けて、教師の取り組みは前向きに展開されているが、ICTを使うことに意識がいきがちなので、ツールとしての活用の在り方を児童生徒共に追究していくことが望まれる。